

U. Neisser & D. A. Jopling (Eds.),  
*The conceptual self in context : Culture, experience, self-understanding*, 1997.  
Chapter 5.

# The internal structure of the self

G. Lakoff

わたしとは誰か? <sup>1</sup> という関心は、日常生活にあまねく広がっている。そのせいで、自己の本質とはなにかという問題は、哲学における中心的な問いとなっている。

西欧哲学の伝統が与えてくれる、古くさく部分的な答えは:

- わたしとは誰かを特徴づけるのは意識と合理性の所在である。すなわち、物理的な身体とその欲望・情熱・要求から分離しそれを「超越」する超越的<sup>ego</sup>自我である。
- それは主観性の所在であり、しばしば「主体」<sup>Subject</sup>とも呼ばれる。
- 身体はひとつの客体<sup>object</sup>であり、物理法則に従って働くが、主体は物理的な実体を持たず、根源的に自由であり、なにもものにも制約されない。
- 主体はどのようにでも自由に思惟<sup>reason</sup>できる。従って、理性は普遍的・超越的であり、身体とか文化とか物理的なものとかに束縛されない。いかなる主体も、世界を外的・客観的な立場から観察し、世界について客観的に思惟することができる。

これが、古典的な主体-客体の区別である。

近年のポストモダン哲学者は、このような主体が存在するという見解自体に挑戦している。彼らはこう論じる:

- 概念は時間と共に変わりうるし、文化間でも変動する。従って、理性は歴史・文化に依存している。
- 思惟する能力は、思考の歴史・文化的な様態に強く制約されている。
- わたしとは誰かは常に歴史・文化に規定される。
- (もっともラディカルなポストモダニズムによれば) 主観性は存在しない。我々は文化的なナラティブの断片によって定義されるパッチワークにすぎない。

## 1. 認知言語学からの証拠

認知言語学は、自己の内的構造について我々がどのように概念化しているか、という点に関する証拠を提供してくれる。

この問題は、言語理論・哲学的論理学にとっても重大である。というのは、照応・再帰代名詞を含む文のうちあるクラスのもの(すべてではない)は、この問題についての適切な分析なしには適切に分析できないからである。通常、照応・再帰代名詞は指示の同一性を指標すると想定されている。しかし、以下の文ではそうではない。

If I were you, I'd hate me. *vs.* If I were you, I'd hate myself.  
 You should step outside yourself and look at yourself.  
 I lost myself in writing. *vs.* I found myself in writing.  
 I'm not myself today.

\* 本章の末尾に、付録として、いくつかのメタファについて日本語の例が掲載されています。1993にUCBのポスドクであったユキオ・ヒロセの提供だそうです。このレジュメでは、本文での英語の例文と一緒にして載せています。なお、助詞が明らかに間違っている箇所がいくつかありましたので、適当になおしてあります。

<sup>1</sup> 小野注: 原文は”who we really are.”

これらの文の意味論的分析のためには、自己の内的構造の概念化を特徴づけている、概念的メタファの慣習的システムを用いなければならない。

## 2. 分割されたひと、客観的な主体

自分を他人がみるようにみようとするとき、我々は自分を2つの部分に分けて概念化している: 主体(意識と合理性の所在、すべての主観的経験の中心)と自己(身体、感情、行為)である。我々の文化は我々にこう告げる。

- 主体は自己を掌握すべきである。
- わたしとは誰か、そのありかたがひとつだけ存在する。それを理解できる外的な視点が存在する。

これらは、わたしとは誰かについてのメタファ的素朴理論の一部であり、伝統的西欧哲学における主体-客体の二分法の素朴版である。

これらのメタファはひとつのシステムを形成する。それは、単一の一般的メタファと、それを拡張するたくさんの特例からなる。一般的メタファは次の通り:

**分割されたひとメタファ**

**マッピング**    – ひととは(主体と自己からなる)合成物である  
                   – 経験する意識は主体である  
                   – 身体的・機能的側面は自己を構成する  
                   – 主体と自己の関係は空間的である: 通常、主体は自己の内側にあるか、自己を所有しているか、自己の上にある。

**詳細**            主体は自己を掌握しているとみなされる。主体は思惟できるが、世界のなかで直接的には機能できない。主体は常に、意識・主観的経験・知覚・理性・判断の所在である。自己はそのほかの側面(身体、感情、過去経験、社会的役割、などなど)からなる。

以下にあげる例文の意味について説明するためには、さらに次の一般的メタファを付け加える必要がある。

**客観的な主体メタファ**

**マッピング**        – 自己は主体の容器である  
                   – 主観的であることは、自己の内側にとどまることである  
                   – 客観的であることは、自己の外側に出ていくことである  
                   これらが以下と結合する:  
                   – 知ることは見えることである。

**知識マッピング**    **ソース領域知識:** 容器の内側からは容器の外側を見ることができない。外側にいるときだけ容器を見ることができる。ふつうは内側にあって、外側に出ていくのには労力と制御が必要である。

**ターゲット領域知識:** 主観的であるときには、自己について知ることはできない。客観的であるときだけ、自分自身について知ることができる。ふつうは主観的であって、客観的であるためには労力と制御が必要である。

**例**                    Step out yourself. Take a good look at yourself. You should see yourself as others see you. 自分の殻をでて自分をよく見つめることが大切だ<sup>2</sup>。

<sup>2</sup> この例文は付録で、客観的な自己メタファとして分類されています。

3.

自己の喪失

自己の喪失メタファ

- マッピング
  - 自己は主体の所有物である
  - 主体による自己の制御は所有である
  - 制御の喪失は所有の喪失である

知識マッピング ソース領域知識: あなたの所有物が奪われたら, あなたはもうそれを持っていない。  
 ターゲット領域知識: なにかがあなたの制御を奪ったら, あなたはもう制御を持っていない。

下位事例 1. 自己の肯定的喪失: 通常の問題からの自由.

例 He is self-possessed. I lost myself in dancing. Only in meditation was she able to let go of herself. She let herself go on the dance floor. The novel takes you over, and you become enmeshed in it. I got caught up in the mood of jubilation. She won my heart. 彼は読書に我を忘れた。

下位事例 2. 自己の否定的喪失: 感情的・狂乱的所有.

例 I don't know what posssed me to do that. I was seized by a longing for her. I got carried away. He's in the grip of an intense hatred. He was possessed by the devil. He's hooked on dope. He's in the grip of his past. He lost consciousness and later regained it. 彼は悪魔にとりつかれた。彼は怒りのあまり我を忘れた。

4.

引き裂かれた自己

引き裂かれた自己メタファ

- 一般的マッピング - あるひとの不整合な諸側面は, ちがうひとびとである。

例 この問題については私は科学者としての自分のほうに傾いている。

特殊事例 1. あちこち動く.

- マッピング
  - 同じ価値を持つことは同じ場所にいることである
  - 決定しないことはあちこち動くことである。

知識マッピング ソース領域知識: 同時に2箇所には居られない。新しい場所に動くことは, 前の場所を去ることを含意する。

ターゲット領域知識: 不整合な価値を持つことはできない。新しいターゲット価値を受け入れることは, 古い価値をあきらめることを含意する。

例 I keep going back and forth between my scientific self and my religious self. I keep returning to my spiritual self. I keep going back and forth between the scientist in me and the priest in me.

特殊事例 2.

- マッピング - 不整合な強い要求ないし欲望は, 葛藤下にあるひとびとである。

例 He's at war with himself over whom to marry. He's struggling with himself over whether to go in to the church. He's conflicted.

## 真の自己メタファ

## マッピング

- あるひとの不整合な諸側面は、ちがうひとびとである。
- あるひとの実現された側面は、主体と同じ場所にある自己である。
- あるひとの実現されていない側面は、主体と同じ場所にはない自己である。

## 辞書的事項

「真の自己」とは、主体の価値と整合的な自己をさしている。

## 含意

「真の自己」をみつけることは、経験する意識による判断と整合的だがそれまでに実現されていない側面を、実現することである。

## 背後の想定

多くの人々は、全然実現できていないが将来は実現したいと思っている価値を持っている。自分の価値と整合的なやりかたで機能できることは、良いことだとみなされる。

## 例

He found himself in writing. I'm trying to get in touch with myself. He found his true self in writing. He went to India to look for his true Self, but all he came back with was a pair of sandals. 彼はものを書くことに{自分/本当の自分}を見いだした。

## 本当のわたしメタファ

## マッピング

- ひととは容器であり、外側にはひとつの自己が、内側には主体とそのほかの自己がある。
- ひとの行為は外的な自己による行為である。

## 想定

問題となっている価値は日常の社会的相互作用に関わる価値である。通常、ひとつの自己が外側にあり、それが持っている価値は主体の持っている価値と整合的である。他人が通常見るのはその自己である。

## 辞書的事項

「本当のわたし」とは、主体の価値と整合的な価値を持つ自己をさしている。

## 例

I'm not myself today. That wasn't the real me yesterday. 僕は今日は自分が自分でないような気がする。

真の自己メタファは、人生全体を決める包括的な価値についてのメタファである。いっぽう、本当のわたしメタファは、社会的相互作用における日常的価値についてのメタファである。

7.

2つの内的自己

一般的な内的自己メタファ

- マッピング – あるひとの異なる諸側面は、複数の異なる自己である。  
 – 隠れていることは中にあることである; 見えることは外にあることである。  
 – 本質的なことは中心的なことである; 非本質的なことは周辺的なことである。

含意 本当の自己(主体と同じ価値を持つ自己)は、内側にある私的な自己である。外側にある公的な自己は本当のものではない。

例 Her sophistication is a facade. You've never seen what he's really like on the inside. 彼は滅多に本当の自分を出さない。彼は人前ではいつも仮面をかぶっている。

特殊事例 1. 受容できない内的自己というメタファ

制約 隠れている内的自己は、質的にいって否定的で、社会的に受容できない。主体の仕事はその内的自己が表に出ないようにすることである。

例 She's sweet on the outside and mean on the inside. The iron hand in the velvet glove. Her petty self came out.

特殊事例 2. 壊れやすい内的自己というメタファ

制約 本当の内的自己は、壊れやすく、外にある偽りの自己によって世界から守られる必要がある。

例 He won't reveal himself to strangers. He rarely show his real Self. Whenever anyone challenges him, he retreats into himself. He retreats into his shell to protect himself. He's outer directed/inner directed.

内的自己メタファは、本当のわたしメタファとは不整合である。後者では「本当の」自己は可視的・公的である。

8.

自分自身に誠実に Being true to yourself

自分自身に誠実にメタファ

マッピング – 自己は、主体のおこないに関する規範を定めるひとである。

例 Don't betray yourself. Be true to yourself. I let myself down. I disappointed myself. 自分を欺いてはいけない。

ここで特に興味深いのは、規範を定めているのが主体ではなく自己だという点である。

- *John disappointed his father.* ... 父親が規範を定めている。
- *I disappointed myself.* ... 自己が規範を定めている。
- *I'm disappointed in myself.* ... 自己が規範を定めているとも、主体が規範を定めているともいえる。 召

使いとしての自己メタファ

## 不在の自己メタファ

- マッピング – 通常の自己統制は、主体が通常の位置にいるということである。  
 – 通常の自己統制の欠如は、主体が通常の位置にいないということである  
 – 自己統制の欠如の程度は、通常の位置からの距離である。

例 彼はようやく我に返った。我にもなく子どもを叱ってしまった。彼は怒りのあまり我を忘れた。

## 事例 1. 容器 (区切られた範囲)

- マッピング – 通常の自己統制は、通常の区切られた範囲のなかでの主体の位置である。主体が通常位置している区切られた範囲の特殊事例として、この世、家、仕事、頭があげられる。

例 He's spaced out. He's out to lunch. The lights are on but no one's home. Dude, you're tripping. Earth to Joshua, come in Joshua. I'm out of it today. Are you out of your mind/head/skull? He's come into his senses. I was just beside myself with rage.

## 事例 2. 垂直性

- マッピング – 通常の自己統制は、主体が地面に位置しているということである。  
 – 通常の自己統制の欠如は、主体がこの世の上にいるということである。  
 – 非現実的<sup>euphoria</sup>の幸福感は高いところにいることである。

例 He's got his feet on the ground. He's down to earth. The ground fell out from under me. We'll kick the props out from under him. I kept floating off in lecture. He's got his head in the clouds. She's reached new heights of ecstasy. I'm high as a kite. I'm on cloud nine. Her smile sent me soaring.

## 四散した自己メタファ

- マッピング – 自己の諸側面は自己の諸部分である。  
 – ある関心事に注意を向けることは、ある場所にいることである。  
 – 自己の諸側面が多く異なる関心事に注意を向けているときには、自己の諸部分は多くの異なる場所にいる。  
 – ある関心事に注意を絞ることは、自己の諸部分を寄せ集めることである。

知識マッピング ソース領域知識: ある実体は、その諸部分が一緒になっているときのみ、適切に機能する。

ターゲット領域知識: 自己は、その諸側面が一緒になっているときのみ、適切に機能する。

例 He's pretty scattered. Pull yourself together. He's all over the place. He hasn't got it together yet. He's not focused. 彼は気が散っている。彼は気持ちを集中させた。彼は気を引き締めた。

## 11. 投影できる主体: 価値と同情の賦与

次の状況について考えてみよう。私はあなたにかつてひどいことをしたことがある。しかしあなたはそれを許し、私のことを憎んでいない。しかし、もしあなたが私のように心が狭かったら、あなたは私を憎んでくださう。すなわち、*If I were you, I'd hate me.*

ここで、私の主体は、かつて私の自己にひどい目にあわされたあなたの自己に投影され、あなたの自己を自己として持っている。私の主体が持っている価値は、あなたの自己と組み合わせられ、

1. 私の判断はあなたに投影される。
2. 私はあなたが経験することを経験する。

### 一般的な投影できる主体メタファ

マッピング – Xの主体は、仮説的な心的空間におけるYの主体に投影される。

#### 事例 1. 判断の投影

マッピング – Xの主体の判断は、Yの主体の判断に投影される。

例 If I were you, I'd punch him in the mouth. If I were you, I'd hate me. If I were you, I'd hate myself. 僕がきみだったら、僕は僕が嫌になる。僕がきみだったら、僕は自分が嫌になる。

#### 事例 2. 同情的投影

マッピング – Xの主体が持っている感覚の能力が、Yの主体に投影される。

例 I feel your pain. I feel for you. If I were you, I'd be depressed too. I know just how you feel. I know what it's like to be in your shoes.

#### 混合した事例

例 If I were you, I would feel just awful, and I would go and punch him in the nose.

## 12. 内的因果関係

### 内的因果関係メタファ

...「原因は力である」メタファと、分割されたひとメタファとが結びついたものである。

マッピング – 内的因果関係は、主体による自己への力の適用が成功したものである。

例 The yogi bent himself into a pretzel. I made myself get up early. I lifted my arm. I can wiggle my ears.

## 13.

## 相棒としての自己: 友達と召使い

## 特殊事例 1. 友達としての自己メタファ

マッピング – 主体と自己は友達である。

例 I think I'll just hang out with myself tonight. I like myself and like being with myself. I debate things with myself all the time. I talk things over with myself before I do anything important. I was debating with myself whether to leave. I convinced myself to stay home. You need to be kind to yourself. I promised myself a vacation. I have a responsibility to myself to give myself the time to exercise.

## 特殊事例 2. 召使いとしての自己メタファ

マッピング – 主体は主人である。  
– 自己は召使いである。

知識マッピング 自己は主体の指令を実行するものとされる。主体は自己を保護する責任がある。

例 I have to get myself to do the laundry. I told myself to prepare for the trip ahead of time. I bawled myself out for being impolite. I'm disappointed in myself. 彼は人を親切にするように自分にいいきかせた。

## 14.

## 自己犠牲

## 自己犠牲の複合体

...以下の3つが結びついたものである。

メタファ1 \* 自己の努力は主体の資源である。

メタファ2 \* Xのために努力することは、Xに努力を与えることである。

\* 自分のためではなく、誰か他のひとのために努力することは、その努力を犠牲にすることである。

\* 効果がないのにことは、努力を浪費することである。

メトニミ3 自己は自己の努力を表す。

マッピング – あるひとが、他の誰かのために努力することは、そのひとの自己を与えることである。

– あるひとが、自分のためではなく他の誰かのために努力することは、そのひとの自己を犠牲にすることである。

– 効果がないのに努力することは、自己を浪費することである。

例 She's giving of herself. She sacrificed herself for her family. You're wasting yourself on him. He's selfish.

15.

自己統制は上

自己統制は上メタファ

... 「統制は上である」メタファ(例, *They fell from power.*) と, 分割されたひとメタファとが結びついたものである。

マッピング – 主体が自己を統制することは, 主体が自己の上にあることである。

例 He's got control over himself.

特殊事例 1

マッピング – 意識は上。  
– 無意識は下。

例 The argument fell to the emotinal level. She slipped into a coma. He fell into a frunken stupor. Wake up to the world around you. After I hit the ground, uncounciousness overtook me.

特殊事例 2

マッピング – 理性は上。  
– 情熱は下。

例 The argument fell to the emotional level. He kept control over his emotions. We had a high-level, rational discussion. A sudden impulse came over me to dye my hair green. He fell into a rage.

16.

システムの構造

メタファからなるこのシステムのおかげで, 我々は意識経験を概念化できる。このシステムは主に3つの問題を扱う: 統制, 整合性, 価値。

どのメタファも, 空間におけるはたらきを含んでいる。さらにこのシステムは, システムとは独立にある概念的メタファ

- 統制は上
- 原因は力
- 知ることは見えること
- 隠れていることは中にあること
- 本質的は中心的

も利用する。

また, このシステムは, 所有-位置の二重性を含んでいる。自己統制は所有としても概念化されるし(自己の喪失メタファ), 位置としても概念化される(主体が自己と同じ位置にいる。不在の主体メタファ)。

このシステムは高次に構造化されているが, 自己整合的ではない(2つのマッピングが対立する含意をもたらすこともある)。

17.

不整合性

- 内的自己メタファ: 本当の自己は内的で隠れている。
- 本当のわたしメタファ; 本当の自己は外的で可視的である。
  
- 不在の自己メタファ: 統制は地面に位置することである。
- 自己統制は上メタファ; 統制は上
  
- 不在の主体メタファ: 自己の外側に移動することは, 自己統制を減らすことである。
- 客観的な主体メタファ; 自己の外側に移動することは, 自己統制を増すことである。
  
- 召使いとしての自己メタファと内的因果関係メタファ: 行動の規範は主体に位置する。
- 自分自身に誠実にメタファ; 行動の規範は自己に位置する。

## 18.

## 哲学的含意

わたしとは誰か? という問いへの説明は, いかなるものであれ, 私たちの概念システムのなかの概念と, 言語を用いなければならない。しかし, その概念システムには, わたしとは誰かについての多重的概念化がすでに組み込まれている。伝統的西欧哲学は分割されたひとメタファに焦点を当て, ポストモダン哲学は単一の統合された自己概念が存在しないことに焦点を当ててきた。

ここで見てきた自己の概念は, 私たちの無意識的な概念体系のなかにあって, 私たちの役に立つように進化してきたのであり, 私たちに自己とは何かということを教えてくれるだろう。

自己に関する日本語のメタファは, 英語のシステムと非常に類似している。このことからわかるのは, この自己のシステムが西洋の文化にだけ現れるのではないということである。これらのメタファは何らかの人間の経験と結びついているのであろう。さらにこのことは, 概念システムが恣意的であるというポストモダニストの主張への反例となっている。

いっぽう, 伝統的西欧哲学において考えられてきたような。単一の自己整合的な概念は存在しない。

私たちが日々働かせている概念システムは, 暗黙的な哲学的理論を含んでいる。日々の働きのために, 私たち皆が答えを必要とする一連の問いがあって, 私たちの無意識的な概念システムは, それらの答えを与えるべく自然に進化してきた。問われるべきなのは次の問いである: これらのシステム — それはあまりにうまく機能しているので, 私たちはそれにほとんど気づかない — は私たちの実存におけるさまざまなリアリティを, どれほどまでに捉えているのか?

おしまい

## ノート

George Lakoff (1941-) は、カリフォルニア大バークレイ校の言語学科教授です。近年の言語学の世界で生成文法派に迫る勢いで勢力を伸ばしている、認知言語学派の旗手のひとりであり、現代の言語学・認知科学におけるリーダー的存在です。著書には、Lakoff&Johnson "Metaphors we live by" (1980. (邦訳「レトリックと人生」大修館書店)、Lakoff "Women, fire, and dangerous things" (1987. 邦訳「認知意味論」紀伊国屋書店) などがあります。

本章で述べているように、Lakoffは、私たちの知識構造の基盤に少数の基礎的なメタファ(たとえ)が存在すると考えます。それはメタファ表現そのものではなく、概念間のマッピングです。たとえば、LOVE IS A JOURNEYメタファ (Lakoff&Johnson,1980) は

- 愛する人は旅人に対応する
- 愛情の関係は乗り物に対応する
- 愛する人の目標は、旅の行き先に対応する

といった対応関係の集合であり、私たちの愛についての(そして、旅についての)概念化の基盤となり、思考を規定している、と考えられます。Lakoffはこのような概念的メタファのことを、<sup>root</sup>根元的メタファ、理想認知モデル(ICM)、など呼びますが、本章では単に、一般的なメタファ的モデルというふうに呼んでいます。

メタファの研究を通じての、人間の認知についてのLakoffの主張は、あえて簡略化すれば、次の4点にまとめられるのではないかと思います。

1. メタファは一般的・遍在的な認知様式である。
2. 人間の知識構造は、メタファ的に組織化されている。
3. それは、少数の概念的メタファを基盤としている。
4. もっとも基礎的な概念的メタファは身体的経験に基づいて成立する。

下にいくほど、受け入れがたい主張になります。たとえば、人間の認知においてメタファは本質的な様式だが(1.)、多様なメタファの理解・算出が可能なのは、知識構造そのものがあらかじめメタファ的に組織化されている(2.)からではない、という立場(Glucksborgら)もあります。また、私たちの概念が、メタファのようななんらかの原理に基づいて、相互に依存しあうかたちで成立している(2.)、という考え方は多くの人が受け入れるところのものでしょうが、その中に少数のより基礎的・原初的な概念図式が存在する(3.)という考え方には、抵抗を感じる人も多いのではないのでしょうか。

その一方で、3.の考え方は、私たちの知識構造を分析する上で有効なツールとなります。Lakoffらの分析の対象は、言語学的現象(e.g., Lakoff(1987)におけるOVERの分析)から、日常的概念(怒り概念の分析)、さらには社会的問題についての概念構造(湾岸戦争についての言説の分析。邦訳「隠喩と戦争」現代思想1991.5.)にまで広がっています。本章もその一連の試みのひとつに位置づけられるものだと思います。

いわゆる根元的メタファという考え方にもとづく分析がいま理論的に抱えている大きな問題は、本章でも述べられているように、不整合な組織化の存在をどう扱うか、という点だと思います。すなわち、同一の概念が異なる2つのやり方で同時に構造化されうるとしたら、それはどのようにしてか、という点です。Lakoffが近年提出している、放射状カテゴリ(Lakoff,1987)とか"不変性原理"といったアイデアは、この問題と関係があるようです。

また、こうした分析が心理学的研究に持ち込まれた際に生じる問題点として、方法論的にみて再現性が保証しにくい、ということが挙げられると思います。その一方、特定の領域の概念構造が不整合性を含んでいた場合、それが思考やコミュニケーションにどう反映されるか、という点は、実証的な検討がまだあまりされていない、面白い問題だと思います。